

〔釈文〕

恵比寿天申訳之記

我等諸神に留守居をあづかり罷居候ところ／あまりよきたい（鯛）をつしりゆへ一盃はいをすごし
 ／たいすい（大酔）ニおよび候あいだをつけこみ、たちまち／かなめいし（要石）をはねかへ
 し、大江戸へまかりいで／蔵くらのこしまきをうちくづしはちまきを／はづし、諸家しよけをつぶし死亡しほ人
 すくなからず／出火しゅつくわいたさせ、はなはだぼうじやくぶじん（傍若無人）の／しよぎやう（所業）
 いたし候ゆへ、さつそくとりおさへ／ぎんミ仕候ところ一とう（一同）のなまづハ身ぶるひし
 て／大ニおそれ一言いちごんのこたへもなく、このときかしら（頭）だち／たるとミゆるもの、つゝし
 んで申たまふ／「おそれながら仰のおもむきかしこまり候也、此たび大へんの／ことハ一とふ
 り御きゝ遊され下さるべし、此義ハ申上ずとも御存の／義にして、はるなつあきふゆ（春夏秋
 冬）のうちにあつじぶん（時分）にさむい日あり／さむいときにあたゝかなる日あり、かく
 のごとくきこうのくるひ（氣候の狂い）／有てかんだん（寒暖）の順なるとしハ少く候、今年
 最もふじゆん（不順）ながら／ごゝく（五穀）のよくミのり候ハ八百万神の御守り遊され候／
 御力による所也、さて天地にかんだん（寒暖）の順のさだまり／ありて、はるなつと其きのじ
 かう（季の時候）ことの外くるひ候ゆへ／わたくしともくにのすまひ（国の住まい）にてハ以
 の外おもしろき／じせつになりたりとわきまへなきものども、らん／しん（乱心）のごとくく
 るひまハ（狂い回り）り候ゆへ、わたくしども／いろく／せいとう（制動）をいたさせども、
 みみにもかけず／らんぼうにくるひさハぎ（狂い騒ぎ）候より、つひに思ひよら／ざる日本へ
 ひゞき御しはい（支配）の内なる／ところをそんじ／候だん、いかなる／つミにおこなわると
 もいはい（違背）／これなく候也、され共わけて、／御ねがひにハ、わたくしども／のこり
 なく御かりつくし候とも／そんじたるいへくら（家蔵）のたつにもあらねバ／まつしばらくの
 いのちを御あづけ／下され、これより日本のとちをまもり／いかなるじかうちがひ（時候違い）
 にても、この／たびのごときことハもうとう仕らず／天下たいへいごこほうねんを／君が代
 をまもり奉り候べしと／一とうにねがひけるゆへ、わたくし／より御わび申上候ところ、さつ
 そく／御きゝすミ下されまことに／もつてありがたく候／きやうこう十月のため／よつて苦難くなん
 のことし／自身除じしんよけ之守／東方 西方 南方 北方／各四方へはるべし／家の中なる／てん上
 にはる／又守りに入置てもよし